大谷さんを偲んで

角瀬保雄　（法政大学教授）

私が大谷さんと知り合った最初は92年7月、弘前での労協の学習会においてであった。ともに講師として呼ばれ、確か大谷さんは協同組合原則について話し、私は協同組合の資本形成について話をしたことを覚えている。同世代であったことから夜の懇親の席では共通の話題に話が弾んだ。

その後、93年の4月、私が北欧の生協を妻とともに訪問した際には、日生協の国際部長であった大谷さんからご紹介をいただき、旅先のホテルまで先方とのアポイントメントのファックスを送っていただくなど大変お世話になった。

その後、京王線沿線の調布、府中在住の協同組合関係者の集まりである調府会にお誘いをいただき、写真家の貞子夫人ともども親しくお付き合いさせていただいた。私が腰椎骨折で入院した際にはお見舞いをいただき、夫人が写した子どもたちに人気のたこちゃん公園の写真集には入院中の無聊を慰められたものである。

2001年末の調府会の忘年会では、ガンとの闘病の痕跡を残しながらも、元気に美酒を酌み交わしたのが思い起こされる。私と全労済ＯＢの大森実氏との大論争もあり、いつになく盛り上がったその日は公認会計士になった福田繁氏や電通大の石川洋一氏などとともに、二次会にまで話が続いた。今にして思えば、みんな別れ難かったのかも知れない。

それから半年も経たないうちに別れのときを迎えることになったが、通夜の席で思いがけなく、同じ大学の同僚で、英語の教師をしていた大谷良夫氏と顔を合わせ、両方でビックリした。聞くところによると大谷さんが次男、良夫氏は三男で、兄弟とのことであった。まったく思いもよらないことがあるものである。

大谷さんは現役から退かれた後、地元の自治会長になって口癖のように地域にはコミュニティがないとこぼされていたが、そうした地域の変革のために一肌も二肌も抜いていただこうと思っていたが、それもいまや叶わぬ夢となってしまった。

通夜の席で石川洋一氏と「こういう音楽葬は良いね」と話しあったが、大谷さんと再会するのもそんな遠いことではないであろう。それまで大谷さんの分まで頑張らねばと思っている。